



見八犬傳

拾五編

卷三十下



709
86



門遠 13
號 709
卷 86



明治三六年
十月九日
購求

下五十三

第百六十四回

義任 重時 異同 兩姓 小逢ふ

這時下總の行徳口敵と待り大川莊小犬田小文吾の登桐山八満呂
復五郎等と俱あ七八千の兵をわけて其地小赴く程上總下總の路次あり
あの隊あ不あ附あく御士豪民の子弟の皆勇あり各あ好あむ者一千二百名あり
既あありて莊小文吾の行徳不到る時這加勢の士卒あ皆あ兩股原木の間
住ありて下總の千葉考胤の壓あとを市原の御士館持あ儀あ杖朝經夷瀆の
御士大樟村主俊故也則あの隊の頭人あ原木兩股の間より行徳へ一里の過
然あ大牙接る処あ相救ふ便あり宜あ於あ角の勢あを張ある不足あれり恁あてを
後安あらるあ莊小文吾のあをあ儘あ人馬をあ找あめてあの日行徳へ來あぬあれあも敢
民業を妨あげ又民屋を燒拂ある地あの理あ据ある塩濱小陣あをあ南あの左あの

八代傳九輝卷三十五

二十

大森堂藏

方小當りく。茫渺る大洋之前面。則西小當りく。端一箇の大河あり。上を
則利根河也。又是を暴河と云。阪東太郎即是る。其中流を前所と
云。真間國府臺の邊に在り。其次市河なり。下流を今井と喚做し。是
より南のく海に朝る早湍の中。一箇の小嶋あり。妙見嶋と叫ぶ。若是を
河畔。下今井村あり。河より西。上今井村あり。因河の字を負し。其本名
暴河也。是よりして西。東へ小松中川。女木逆井。猿江村。五本松。南本所。北本
所。兩河より西を武藏と云。あは葛飾郡也。其邊処々小流あり。村落
も亦ヨリ。枚擧るる不遑。南へ則深川。蓋行徳よりして。兩河を
今之路と。同トク。ねど。約莫四五里許。然バ。莊久の地圖。小
文吾の問でも。ある。故御之。行徳より。去向も。都て。孰路。されども。猶も。間謀
見を遣して。敵の虚実を探る。不。這地の寄隊へ。出。來。ま。但。妙見嶋

と今井河の岸。柵を作り。守屋を構へ。高く水樓を抗て。豫より。あを成る。敵の
士卒二三千名あり。河原より。柵の頭人へ。扇谷の兵頭。小越。小權。太表。練。千葉
自胤の兵頭。援嶋郡司。將衛。是。又。妙見嶋の頭人へ。大石。憲重の。老。黨。彦
別夜。又。五。口。數。世。五。百。個。の。兵。を。從。へ。水。中。に。千。仞。を。鍊。鏃。子。を。張。且。一。
敵の馬脚を套。林。んと。欲し。又。水。涯。の。時。尚。世。早。る。大。砲。を。且。並
備へ。敵河を涉。さん。と。前。岸。に。立。取。ら。ぬ。敷。拂。んと。構。へ。原。准。備。九。庸。を
り。ざ。り。と。間。謀。見。の。告。る。不。も。莊。久。是。を。知。り。て。冷。笑。ひ。り。小。文。吾。の。お。や。う。
這大河の前面。敵の柵の逆より。封疆を成る。與。り。今。初。め。あ。る。あ。る。
ね。今。の。寄。隊。の。先。鋒。を。余。反。て。成。を。固。く。て。破。れ。し。と。の。欲。ま。る。主。客。の
准。備。表。裏。中。其。勇。を。知。る。不。足。れ。り。と。い。へ。小。文。吾。點。頭。て。然。之。他。者。が
地。を。易。て。只。其。成。を。固。く。ま。る。不。あ。る。寄。隊。の。大。軍。を。待。ん。と。の。為。る。べ。し。

あつりとも我々の則是防禦使より找く人の國郡を奪んとて來ぬ事あり
む今若謀計をのり。那兩柵を捕れとる。難くもあつぬ技をさう先只館の
御旨を守りて寄隊の大軍を待て一度破らんとお莊々素よりあの意わ
る。隨即濱邊柵を構へ。且塩濱と今井の上流を多く快船を維ぐの
爰小長陣の準備して寄隊の向ふを俟。十一月の果敢る。盡て十二月の
初めより有佳。程小満呂復五郎重時の這陣中。做工もる。徒然お
堪ざりければ。有一日獨立して漫ゆる。程小徳。今此の地方を
川添の村落多る。所謂堀江猫貫。缺真回。関嶋。新井。湊村。河原大
和田。稻荷木。市河。至れば。街衢同く。も。の餘も猶も。人を要る。け。お
備る。ぬ。回話。休題。の。日復五郎重時。八東西と。ち。巡る。隨。憶。を。凌
村。小。來。よ。ける。折。く。夏。々。丁。々。と。焼。刀。の。稜。打。鳴。を。鎖。の。音。耳。に。响。け。く。高。か

ほととどえれ。這村の坎。稍。盡。處。小。最。寒。く。方。鏡。匠。が。家。あり。と。主人。と。か。が。一
個の漢子。年。齡。五。十。有。餘。る。が。其。子。也。あ。ら。ん。年。十。六。七。る。一。個。の。猴。子
と。相。共。小。鏡。を。鍛。冶。し。く。又。く。器。械。を。製。出。せ。る。を。有。け。る。重。時。を。今。這。里。お
きて。憶。む。其。店。前。小。歩。を。駐。り。て。簾。小。掛。夾。み。る。出。刃。と。刀。子。を。見。る。お。皆
是。藤。原。信。之。と。勒。あ。る。四。字。の。銘。あり。又。其。側。の。壁。に。白。土。一。七。大。多。竹。輪。の
内。小。屋。字。と。寫。さ。る。丸。屋。る。べ。と。猜。せ。る。且。其。猴。子。の。逞。げ。る。全。身。黒
く。膏。満。る。眼。圓。小。骨。太。純。身。小。袴。の。敗。て。下。短。多。夾。衣。只。單。被。し。ま。ご。こ
取。寒。け。た。面。色。せ。む。臙。祖。父。の。兩。袖。を。腹。小。巻。て。裳。を。股。ま。で。引。折。結
ま。ご。合。鏡。を。打。つ。為。体。都。て。槍。棒。の。多。法。小。稱。ひ。て。背。力。あ。る。べ。く。見。え。る。其。里
重。時。の。立。も。治。去。ら。む。其。冷。ひ。果。る。と。急。お。主人。を。喚。び。て。お。あ。ら。う。登。り。其。里
る。漢。子。が。作。り。新。刀。の。丸。也。あ。ら。我。買。ま。く。欲。を。出。し。て。見。せ。よ。甚。だ。麻。を

ちと回れて主人の見久の官人先框へ尻と撰さるる先代まで刀鍛冶の
 新刀もよくひひ小可の其弟子を木尻八と喚ぶるの老毛化て鈍る本性
 故の技を拙くひへ出刃刀子と作るもとのを重時うち開て開の左も右も
 われあの家號の丸屋おわらぬ竹輪の安房の満呂の花號に我の昔年亡
 びの麻呂小五郎信時の親族の満呂復五郎重時は今も里見殿の
 仕まつる。昨今塩濱の陣に在る若是汝が東人の先祖の満呂氏おわらぬ
 る飲矧や又這少年の骨相を見て猜する武藝を嗜る者お似たり年の
 幾箇も名を何と久後馮心地をまる由緒のやわらむ欲しとの
 まて木尻八頭を擡て原来御身の満呂氏也。濱の御陣より来ませし飲矧
 ままのりく恥し小可が故東人も則是満呂氏也。在昔鎌倉の將軍家
 創業の時頼朝公に従ひまつり。麻呂五郎信俊殿とやらの庶流おひとも

子孫民間の降より。鍊匠として生活をもと口碑小傳への。詳るのし知る
 父ども既小猜しあま。今もる満呂氏也。信之の家を通稱之然れ。這子の小
 可が主助也。故東人丸屋太郎平の獨子るれが再太郎と喚做し。二
 親早く身故り。小可年来後見して。今茲る十八歳ふる。然れ。這
 子の生年の文正元年丙戌也。且丁の月日お生れし。所以飲甚し。熱性
 る。生活さへ火を宗とま。鍛冶の子でひ。性として水と好む。冬も渾
 細して。村後る。暴河へ身を漫ま。ありても。反て快し。とのゆり。あま。誰
 教ね。水戲。自由をゆ。夏。早湍を敷る。因。西の岸。届
 る。小可。叱。林。免毛。も。听。嗜好。又。只是。角。触
 白打槍。棒。數。劍。悄々。地。其。師。就。て。学。ぶ。の。う。田。舎。お。は。れ。良。師。お。遇
 へ。何。や。ら。拙。處。発。技。を。林。月。力。あ。れ。這。頭。で。白。人。相。撲。の。最。多。とい

る似而非腕扱でいへ。親の肖は破落戸をまぶやくひんといひや。呵々とうち笑へ。重時只管感して已まを再太郎とてとくろりひさる。意の優る這子の本性今戦國の時方りて。莊客まれ職匠まれ武藝まれ。統袴を求め名を揚家と與ま。但し那身の熱性とも冬の日本水に浸りて凍るるや。あの一條の信とて詰ると木丸八寸あむを訝りあの理りながら。あのも亦極めて故わ。我家五世の祖にける。麻呂太郎平信之より相傳へし。人魚の膏油今有る傳へ云ふの膏油は昔一箇の樽に装られて塩漬に漂寓りし。信之不思議の拾得ての秘藏せし其樽は樟木とて作ら。藤蔓を柄小あ。其大洋の酒。正年久しかりれば。牡蛎海藻まどあましく粘る。人魚膏油と寫し。四箇字の幽小讀れとを然も孰の困の産物を。流れ來ぬ故を知も。又何小用る。正を知も。凝りて蠟の像くまける。を开ぐ。終藏め置ける。有一年一個の頭陀

あり。我家小宿せり。日其頭陀件の膏油我家小在りと。少知りて。主人信之。誨る。尚人ありて。人魚の肉を啖ふと。其壽二千年と有る。惜る膏油。氣の齡を延ま。奇効する。遮莫是と。燈火小做ま。と。風雨も減む。て。日月と光を同く。又人魚の鼻。臍。肛門。都て九孔。小塗ちて。水小入れ。大寒の日といふ。猶温也。凍ると。波と潜りて。海も涉る。又刀劍。小塗ちて。鐵を研り。角を辟く。べし。試め。と。いふ。と。是信之の時より。多て。刀鍛冶と。活業。小あ。れ。件の人魚の膏油と。して。作る所の新刀。小塗ちて。鐵研と。名つけ。是と。售る。果しく。其驗あり。けれ。漸々。小初。れて。家傳。小あ。る。多。せり。時。惜や。膏油。を用盡して。殘り。二三合。あり。て。是を。兒孫。小貽。さんと。則。硝子の。壺。小藏。めて。其。歳。月。を。寫し。あ。と。傳へ。て。今。あ。る。と。再。太郎。の。試。小。大。前。年。の。冬。も。死。那。膏。油。と。身。小。塗。ち。て。今。井。河。小。入。て。畑。や。小。河。水。温。ると。湯。の。如。く。波。濤。を。潜。る。も。自由。を。前。面。の。

岸へ渉まゝと。見る者一奇とせざるらん。任れ他が熱性や。酒を好む。冬も又冬の日水も戯れても凍ぢ溺るゝと。死ん人魚の膏油の奇特多ふ。然るを益の技のそ。費るゝが落情さ。小可緊く推林で隠して使せざれば。今ある所を一合あまり。二合あは足らざるべ。然ら冬の日水を酒に凍ぢと。一奇談の是なる所以。鼻春蟻めりて説誘る折々。這門道來て立在る一個の童男あり。と。窶る行其衣を腰に短刀を。下り不跨做。背の最小る。袂裏衣を駢ふる。左の小菅笠を引提て。前より王宮の問答。耳を教けて。少て居り。と。知ざり。重時の今木尻八が話説。再太郎の人と。と。人魚の膏油の奇特を。ゆゆしく。欽び不堪。され。又木尻八に向いて。ゆゆしく。少年。正小我。と。同宗を。先祖麻呂信俊。主の數世の末葉。と。今ゆ。小疑ふ。へ。く。我。の。事。妻。も。る。く。子。も。さ。け。ん。が。と。多。う。た。心。地。を。も。言。倉。卒。不。似。え。る。も。這。子。を。

我養嗣を取ね。俱小里見殿。不仕ま。父祖の與。ゆ。孝順を。鍛冶。て。其。身。を。終。小。踰。え。況。今。番。の。軍。役。不。従。て。戰。功。わ。る。名。も。揚。げ。家。も。自。主。幸。ひ。あ。ん。和。主。の。あ。る。其。麻。呂。と。問。へ。木。尻。八。沈。吟。と。開。他。が。立。身。の。世。階。梯。の。ゆ。ゆ。我。胤。を。ぬ。先。主。人。の。獨。子。で。い。へ。と。い。う。再。太。郎。を。見。る。と。再。太。郎。も。目。今。少。く。如。し。和。郎。這。大。父。郎。の。養。嗣。の。武。士。と。欲。す。情。願。の。稱。ん。左。右。ゆ。ゆ。中。も。主。張。して。隨。意。答。へ。票。さ。ま。ま。と。い。は。れ。て。再。太。郎。の。又。死。る。と。解。り。解。り。改。め。重。時。の。ち。向。ひ。く。不。肖。の。我。身。を。子。に。せ。ん。と。あ。る。御。意。を。ゆ。ゆ。の。思。ひ。け。る。幸。ひ。あ。ん。ゆ。ゆ。の。勿。論。他。姓。の。親。の。家。を。絶。不。忍。び。必。推。辭。べ。け。れ。も。俱。小。是。滿。呂。氏。の。同。宗。を。れ。一。家。小。ひ。と。今。より。親。と。仰。せ。ま。る。先。三。拜。を。受。め。ひ。と。い。ひ。躬。て。身。を。退。せ。て。云。い。重。時。を。拜。ま。れ。重。時。も。亦。遽。く。礼。を。返。せ。る。良。縁。奇。遇。の。欽。び。不。就。て。又。木。尻。八。を。再。太。郎。が。日。屬。の。似。賢。貌。る。言。ゆ。小。我。を。折。一。宗。



八代傳九郎卷三十五

矢

文溪堂藏



八代傳九郎卷三十五

文溪堂藏

ると半响許さてもくと口訥りてのどを答ふる親心子小甘口多村酒のよの用あるを
 知るねども夜消の與小買措れ。二合半堀架厨より出せ乾魚と吹草火ふきくさ灸
 舖の碟子執添て却重時を上坐あが請ひつ。俱とも献酬けんじゆを親子の契ちぎり千世ちよまでと
 訛まご一壽詞いすごも憑心まごころに。奥おく蘭らん不及いふじ時重時ハ酒菜しゆさいせんを。勸すす肚はらる長財ながさい裏うらよ
 了しりぞ合あま圓ま金かね十兩じゆらうを紙し拵ぢゆ拵ぢゆ便べん面めん小載せうざいて是こゝを木き丸まる八はち贈くわりていいかか。我われのまご其
 詳しやうるのどと知しねども和わ主しゆ忠ちゆう信しんの心こゝろのど先せん主人しゆじんの狐きつねを守まもり育よる甲か斐ひもる我われ今いま切きり
 養やしやひ合あひて且かつ塩濱しんべんの陣所ぢんじよへおて還かへれ明日あしたよりさる徒た然ぜんるる陣ぢん中ちゆうなれば餘
 財さい。あちのと薄うす義ぎ多たるのど。這こゝろ然ぜんと表あらわすのど。いふと木き丸まる八はち寄よるあけ開ひらけ亦また要
 るい御ご仁に義ぎへ這こゝろ大金おほたかねと争い何なにいせん。辭いひひて受うめめのどさううと重おも時とき連れんり不ふ推おし薦すすめりて
 披ひらり合あままれれ木き丸まる八はち只ただ得え受う載ざいして馳かて懐なつ小こ來きる程ほど再また太郎たろうハ恭まことしく重おも時とき不
 ら向むかひて為なり其その歎なげひと演の演のけり。當ま下した復また五ご郎らう重おも時ときハ木き丸まる八はち談だんままり知しるごとく

敵てきの二ふた柵さくハ西にしの河原かはらと妙見たみ嶋じま不な在あり我われ再また太郎たろうと共とも侶りよ小こ早はや湍たふを涉わたり先せん駈かりて
 柵さくと破やぶり思おもふ多た為なり人ひと魚いさなの膏油あぶらを欲ほまるといへ木き丸まる八はち異い議ぎもるあけ開ひらけと
 易やすにいふと心こゝろハ奥おく小こ赴まりまり件くだんの堀ほりと出でるあり又また再また太郎たろうハ新あらたに綿わた入い衣えを被か更
 さ容ゆるて故ゆゑりる兩ふた刀やいばを遞た與たまひていいかか。是こゝろは汝なんぢが先せん祖そら。傳たれらるあり什物しじぶつなればも
 數かず世よ用もちるければ藏くら措され其その甲斐かひありて今日けふよりハ主しゆ共とも侶りよ小こ世よ出でるあり刀やいばの恥ちも忠ちゆう孝かうの
 道みちを喪なひひいと論ごんせ再また大おほ郎らう受う載ざいしてそちこゝろあるのどいい親おや小こ存ぞんにい親おやの思おもひ
 返かへさり別わかりるとも義ぎ父ふ大人おとなの庇かきふると。武ぶ士しの數かず小こ入いるるあり必かならず安やす房ぶどうへ迎むかひて反
 哺への本ほん意いを果はまべ。といふ木き丸まる八はち領りやうくも胸むね疼いたれれば答こたへせ涙なみだと共とも人ひと魚いさなの
 膏油あぶらの堀ほりと卒つひとむるあり不ふ遞た與たまひて重おも時とき怡よろこ悦び小こ堪たままざ其その心こゝろ操さを謝あやし告こ別わかりて
 身みを起おこさりままりああり程ほど小こ門かど傷やぶれ立たちあり那あの童どう男おとこハ遠とほく聲こゑと被かてありありありあり
 喚よび林はやしがめり立たち投なげ捨すて内うちへ入いりて重おも時とき小こ向むかひていいかか。仙せんままり一ひと時ときハ幾いくばく番ばん蹴く脚あし目め不

被り一日のありけを今選不面とされし料らそ那里も来身折這里も主人と問
 答不名告めゆとゆゆ知ぬ小父は是れ我先父の義兄弟満呂復五郎王にり
 信已の安西出来介景次が獨子なる安西成之介を侍り豫知せぬけん我身
 母の俗縁ある上總多山中村弓折塚の邊を遠山寺と喚做したる山院の住
 持の養れて年来喝食を侍りし日裏に我父出来介の忠義の爲の素藤と刺
 ち欲あり事成そ其里も命を殞したと風の便りもさるるち歎てのゆり
 なる夜夢不奇に生口あり親の聲歎とわびてを成之介のまご知れ今番里見
 殿の大敵あり鎌倉の兩管領合縦連衡の大軍をめて水陸より攻伐し我義兄
 弟満呂復五郎大川大田兩將のまご隸れて必行徳の陣に在ん汝那里も赴て
 復五郎も憑きて役不從へ倘幸ひして軍功あり里見殿に仕まると我志を紹ぐ
 足ん勉めよかとふ歎と思へ愕然として敬馬に覺けり覺ての後も胸裏にて其聲

尚蠅々と耳邊に在るふ似され歎の中勇れて正徳たるべく思ひく恥て師の坊に
 告知して身の暇を請ひける師の坊允しぬら只得意衷と寫送して情地不旅の
 準備とある夜不紛れ亡命して且れ走り暮春に宿る通路の艱苦と厭む今日稍塩
 漬の陣所も来て則御身も尋ねし漫行をせしれり那里もまごといふと
 たなめて料らるる這里も在せし知るものも満呂同宗の義を仗て子と養ま欲玉
 ぶ其要談の最中氣に傍るる名告もゆせ言の果るともゆり義を仗るとは御
 身の小父へも猶子と商して這番の役も俱しぬら光も増ん玉櫛司をさる夜我
 二親も草の原を焚ひゆる宿世鈍多劍大刀身の脚鬼の山院も生育る物部の
 八十宇治河の疎けれも夏の日消し年毎も山河の水も戯れて涸れ上目もさるる
 暴河も渉るも後るる思ひぬは是れ果敢た技をさる一箇の本事も立て願ひ
 遂さるる口説く言葉の露も清に心に見れて直と額衝く板席の塵埃も洗ひ

流きまふ涙坐不找とける思ひなき又這奇遇かさてなる駭にあら木尻八再
 太へあら重時いつごとく感嘆大なる平伏成之介の額と推抗は得と
 見て現穉顔不覚ある出来小が子であらう杖も大なるけり哉汝が親の末期の
 筆も寫貽され我一日も汝の思ふさあなれども日暮も素藤と對治の
 折我身深癯も命危く療養茶餌小月を劇して久し屏居てあけら先月申
 院に至りて刀瘡を癒へ又軍陣不從て往る日あ地小來はれは汝親の
 送言と傳る便宜あり一其志親も劣らぬ忠義を紹介して十五不足も總
 角の身さへ命とて今番の軍役不從んそ玉鉾の路辰に上總なる山
 中村の山院より我を尋て來りけり了得親の子にけり出来小の死の折館の
 御尋あり我既汝の事と言上ふ及び御執立あるべし其御内意の
 事かども是より後由云云と事言れは件の二義も再度の御沙汰されはる汝の親と

共侶も義侠の與命と捨ける南弥六の養嗣増松の例もあは憑に當陣の
 両大将犬川大田不懇も必や用ひられ九年の幾ふるをとも向へ成之介然も今
 茲の十二もゆるる宜く馬心もなるとあは袂と折返して情と感涙と推拭へ重
 時さして慰め却木尻八と再太郎成之介と引會され甲乙俱も重更耳も奇
 遇を感し且欺びて送不憑しく思ひけり當下重時又いかり我今日漫約の獨陣中
 徒然と慰る為のを惜地も今井河の浅湍と撈りて欲するのわれん然と料せ
 ら小来て同姓の子と養食て且馮河の奇茶とゆゆる早く免許を請んは
 束つ不違ぬ欵ひ何は是不優免早く陣所推乃かして我両將か免許を請んは
 とのそが誰か欵ひ勇ざらん再太郎の膏油堀の袂裏を引く家傳の両刀を
 腰不帯で成之介と共侶も木尻八別を告て遽しく重時の後不眼をみて留難
 なる木尻八も門傍も立て目送りける憊而満呂復五郎重時の件の兩個の少年も俱して

塩濱の陣かかると多随即大川莊介と大田小文吾有る事の顛末を詳に告懇て
 請ふて成之介と再太郎と見せ給ふ莊介小文吾感歎して詞家片賞を授け安西
 出来人の孤のまの豫館の御仁慈ありのま其ま及れぬともいひ荒磯南弥六の後と
 ぞえ那磯崎増松の疾父阿弥七も俱せられて洲崎の御陣へ参りて荒川主奉之烽
 火臺の助役あるまら有徳れば這安西成之介の孝義武勇の心操と只今館をすえ
 上る必是御感あり軍役充ぬる那増松のまらるべし然とも洲崎の御陣を路
 近々ぬ不徳をくろの小事とて火急の注進の憚りあり異日の便宜の据んの又その少
 年再太郎の満呂同姓の義を仗て復五和殿の養嗣せまら欲まるとも願ひの趣ある
 亦奇遇とのま一人とて後死の不孝の第一とて聖經の本本文のわらぬも館に召
 され情願免許疑ひる其折を這少年を復五郎和殿のまら屬人小腕の相心一に
 掙を教えて軍功の御感八八増まらん誠の珍重とて祝して成之介の両刀

と身甲と與へ又再太郎も札を甲冑と取せけり登時莊介又のまら這安西成之
 介の先父出来人景次の志を紹ぐ者なれが今より字の之の字を省て就景
 重と名告るべし又再太郎も実名を敵陣の時名を來便をんかある
 信重と告るまらるる景の安西景益ら則那家の通稱也信も亦麻呂
 信俊より世々名を兼紹ぐ一字を甲乙是加るる重字とてせし俱小重
 時不遵ふく世も然るを表す亦よらまらと解示せ再太郎と就介の相
 狹ひて言葉あるまら重時急の推禁せ給ふ莊介の向ひてのまら他もが為過分
 此御意忝くいへも在下何等の徳ありて其ま預のひんや願ふの両君名名の
 一字も他も授けらるる子孫の傳る榮をて面目の上のひんを御許容れ
 申すと請ふまら莊介のまら不本我門が名の靈玉の八は据る者なれ分りて
 人の授けらるる和殿の他もが親品をまら謙遜辭讓の人のまら口誦

要るにあらざり。論其小文吾も亦いさ。物本末の事終始の再太郎本の
 満呂も存。就其始の重時。小据り。さるといふべし。然るに他人の名字を乞ひ。
 本と棄てて未を欲り。始を思ひ。終に就く。事の宜しむ。名を取らる。
 実を取らぬ。とされて重時脱を路。就其再太郎と共侶。其歎ひ。演けり。
 其時大川大田兩將。不従ふ。當席に在る者。登桐山八良。干名。皆是腹
 心。さぬ。いられ。重時の又膝を找め。其杖と小文吾も告る。在下。今日料を
 也。這再太郎が家。おける。人魚の膏油を。以て。人の身の九孔。か
 塗りて。水を入れば。今大寒の時。とも。敢凍え。溺る。と。海を自在。不歩を。べ
 経験。再太郎が。既。試ひ。ひ。小実。高菜。との。惜。其膏油。今。あり。所
 三。個。用。る。足。る。ぬ。一。際。の。館。の。御。旨。を。敵。の。推。寄。申。せ。待。つ。の。找

むと許されぬ。懍り。か。愚意。を。り。量。る。今。目前。敵。の。三。柵。を。破。り。
 河を。涉。り。寄。隊。の。胆。を。拉。ぶ。全。勝。の。勢。い。多。べ。一。際。這。意。を。思。ひ。て。御。寄
 身。單。立。出。て。土。民。の。回。る。ど。う。淺。瀬。を。穿。ぬ。ひ。ひ。涉。る。處。を。保。ひ。て。就。介
 も。夏。毎。の。溪。川。の。水。を。戲。れ。て。く。四。つ。と。の。り。と。い。へ。在。下。他。等。を。相。伴。ふ。今
 宵。悄。地。河。を。涉。り。敵。の。柵。火。を。放。さ。登。時。兩。君。の。快。船。を。一。隊。の。河。上
 より。前。面。渡。り。て。敵。の。活。路。を。殺。り。空。地。一。隊。の。徑。今。井。河。より。一。校。を。て
 攻。伐。玉。り。の。唾。と。敵。の。頭。人。も。虜。お。せ。る。易。多。し。一。の。談。小。儘。一。の
 む。や。と。三。男。も。薦。れ。小。文。吾。の。只。點。頭。の。も。許。さ。れ。ぬ。良。干
 名。の。皆。是。を。喜。し。て。良。策。と。を。思。ひ。ける。中。の。井。村。の。件。の。三。男。の。趣。を。听。果。て
 却。り。我。も。亦。豫。り。其。義。を。思。ひ。さ。る。ぬ。館。の。御。旨。を。り。今日
 まで。寄。隊。を。俟。て。徒。日。を。過。せ。只。戰。飯。を。費。す。謀。る。者。不。似。り。

然先那柵と破して河を渡して敵を俟た。寄隊と戦ひて他が
 勢ひを折る足んあれども那二柵と世尚稀き大銃の備あり且究竟の
 弓を引くと咄り然りと漫る攻伐は自家に戦致すと思ひ久と黙
 止ふ。滿呂生然奇某あつた寔に便宜といつべ。遮莫漫に構るべし
 今宵我唐の張巡なる段の傲ふて引く某稟人を船に建て烏夜の乗して
 突然と敵の二柵を推し脅して他が前を合ひ銃丸も引つて然るに那
 柵の頭人等が詭計をたて後悔せ我士卒又後の夜に船を那に漕ぎて
 亦復柵を脅さとも敵の必先度不懲りて前を射出さす銃砲を林に射
 倒し由断せん是必然の勢ひ其折つて復五郎和殿の這少年等に従へ
 悄やう河を渉して敵の柵に火を放さ攻一攻や敵を拂ん先某稟人の計
 畢りて敵を懲りて弓箭火銃を禁め其の失ありと諭其重時信服

まで妙計とぞ感とけの計いと相歡ぶ登桐山八良干の小文五口不向ひて
 のやう在下近届蜀軍書書の講を少ひひ元人東都の羅維貫中が三國志演
 義を載ると云那魏公曹操が呉の孫權と攻伐を欲りけ。赤壁の聞
 戦以前不呉の都督周瑜が胸狭くて劉玄徳の軍師をけ。諸葛孔明の
 才と思む故に益可な數萬の箭を求めて其前約束の日と違ふ速に作りし
 むの罪をめて斬らんとしを孔明輒く諾るひて敢困る面色せ某稟偶人を
 多く作りて井を數十箇の艦に建て野干玉の夜の深し時候敵の守る城の
 る所の江邊に漕ぎよき。鼓を鳴らし関の聲を揚げ俄然として攻蒐るべし
 勢ひを示せり城の士卒等驚馬に謀る。箭を射出さ風が横吹く驟雨
 よりも敏速なりければ其某稟人ふ立ッ処幾萬幾千條ると知る既ふり孔明
 明に思ひの隨ふ敵の前を得て船を漕返ささる其前數萬ありけ

則周瑜（まゐりあつちの）與（む）へ（へ）周瑜（あつち）其智（そのち）不我（が）折（や）て（い）く媚（ね）く思（おも）ひ（た）と（の）あ（ち）是
 演義（えんぎ）の趣（おもむ）へ（か）る（ふ）今（いま）大川（おほの）主（ぬし）の（ま）を（を）説（と）く（く）唐（たう）の（ち）張巡（ちやうしん）の（ま）段（だん）の（ま）倣（なま）か（と）宣
 ひ（の）あ（ら）る（る）か（ら）願（ねが）ふ（の）誨（し）え（の）い（ひ）と（と）問（と）ふ（を）小文（こぶん）吾（わ）ち（の）武（ぶ）を（を）宗（しゆ）と
 考（かんが）へ（る）文字（ぶんじ）の（お）大塚（おほの）犬川（いぬがわ）及（およ）ぶ（べ）も（あ）ら（ざ）れ（ば）も（も）其（その）を（を）考（かんが）へ（る）大川（おほの）序（しゆ）次（じ）の
 一書（いつしよ）の（お）虚（うそ）と（ま）実（まこと）と（あ）相（あ）半（はん）して（つ）作り（つ）設（た）け（り）の（お）少（すく）く（も）を（を）壁（か）言（ごん）目（め）今（いま）登（のぼ）相（あ）の（お）孔（こう）明（めい）
 光（ひかり）の（お）通鑑（つうかん）の（お）因（よ）り（て）唐書（たうしよ）と（あ）按（あ）ま（る）ふ（ふ）唐（たう）の（ち）張巡（ちやうしん）の（ま）故事（ごじ）と（あ）羅貫中（らくわんちゆう）の（ま）撮
 合（あ）は（る）る（る）那（な）張巡（ちやうしん）の（ち）唐（たう）の（ち）忠臣（ちゆうしん）と（あ）玄宗（けんじゆう）帝（てい）の時（とき）安祿山（あんろくさん）が（お）乱（らん）唐（たう）の（ち）諸臣（しよしん）位（い）高（たか）た
 り（も）多（おほ）く（も）賊（ぞく）の（お）降（くだ）り（し）小（こ）惟張巡（ちやうしん）の（ち）孤城（こじやう）を（を）守（まも）り（て）死（し）に（ま）至（いた）る（ま）で（ま）敢（あ）屈（くつ）せ（ず）竟（や）く（も）矢種（やしゆ）
 彈（たま）れ（り）張巡（ちやうしん）則（すな）ち（も）粟（も）と（を）縛（む）ね（て）人（ひと）の（お）ど（く）作（つ）成（せ）ま（る）者（もの）一（い）千（せん）餘（じゆ）是（こ）も（も）黒衣（くろい）と（を）被（ひ）せ（く）

以（も）夜（よ）絶（た）け（り）下（くだ）ま（る）潮兵（しやうへい）潮兵（しやうへい）争（あ）ふ（て）これ（を）射（や）る（く）久（ひさ）し（く）乃（すな）ち（も）其（その）甚（おほ）果（くわ）人（ひと）を（を）引（ひ）揚（あ）
 還（か）せ（り）潮兵（しやうへい）の（お）前（まへ）十（じゆ）萬（まん）を（を）ぬ（ら）る（る）の（ち）後（のち）復（か）人（ひと）を（を）絶（た）け（り）下（くだ）ま（る）賊徒（ぞくと）笑（わら）ふ（も）備（そな）と（を）設（た）け
 せ（り）乃（すな）ち（も）死（し）士（し）五（ご）百（ひやく）を（を）以（も）進（しん）く（も）賊（ぞく）の（ち）陣（ちん）營（えい）と（を）斫（き）る（る）潮軍（しやうじゆん）大（おほ）く（も）乱（らん）れ（り）遂（つひ）に（も）思（おも）ふ
 幕（まく）と（を）焼（や）て（り）奔（か）る（る）追（お）ふ（と）十（じゆ）餘（じゆ）里（り）唐書（たうしよ）第（だい）百（ひやく）九（きゆう）十二（じふに）忠義（ちゆうぎ）列傳（れつでん）張巡（ちやうしん）
 傳（でん）小見（せうけん）を（を）近（ちか）世（せ）天朝（てんてう）の（ち）謀（まう）の（お）倣（なま）い（ひ）の（ち）惟（た）千（せん）早（そう）の（ち）楠（なん）是（こ）も（も）忠義（ちゆうぎ）の（ち）張
 巡（ちやうしん）と（あ）拮（け）棹（せう）して（り）楠（なん）公（こう）猶（な）勝（か）れ（り）の（ち）他（た）那（た）演義（えんぎ）小見（せうけん）を（を）漢中（かんちゆう）の（ち）閉戦（へいせん）の（ち）孔明（こうめい）が
 城（じやう）の（ち）門（もん）を（を）開（ひら）いて（り）反（か）り（て）曹操（せうさう）を（を）退（ひ）け（り）る（る）其（その）実（まこと）の（ち）孔明（こうめい）か（ら）は（る）則（すな）ち（も）是（こ）も（も）趙雲（せういん）
 趙雲（せういん）の（ち）外（がい）の（ち）門（もん）を（を）開（ひら）いて（り）敵（てき）と（を）退（ひ）け（り）者（もの）唐（たう）の（ち）時（とき）の（ち）も（も）これ（を）あり（る）木子（もくし）謹行（きんぎやう）即（すな）ち（も）是（こ）も
 事（こと）の（ち）唐書（たうしよ）第（だい）百（ひやく）十（じゆ）木子（もくし）謹行（きんぎやう）の（ち）詳（しやう）と（あ）又（また）孔明（こうめい）が（お）南蛮（なんばん）攻（こう）ふ（も）獅子（しし）と（を）作（つ）り（て）孟
 獲（わく）の（ち）使（し）ふ（も）猛獸（まうじゆう）と（を）權（けん）と（を）追（お）奔（か）せ（り）と（も）其（その）説（と）の（ち）身（み）所（しよ）別（べつ）小父母（せうふぼ）ある（る）富言（ふげん）
 恠（が）る（る）の（ち）言（ごん）れ（り）と（も）あ（ら）要（え）る（る）け（れ）具（ぐ）お（せ）ぎ（も）異日（いじつ）別（べつ）小識（せき）ま（る）蓋（け）士（し）君子（くんし）の（ち）釋史（しやくし）物（ぶつ）の

毛鶴山三
國志演義
の評注及
金聖歎
外書や
是等の虚
實を辨せ
され猶能
ぬありし
因て聊是
あ及ぶ婦
切の爲あ
厭るべ

本と悦ぶ。是は學問の餘樂の。先づ眼と史傳を晒して其見るを博くさ
れ。誰う虚実を分別して作者の隱微を發明せんや。あつて今酒家の敵の
箭を合する故事を談する。王國演義を取ぎて唐書の張巡傳を引る。然
ちで疑ふところと解れて感する。良干重時就小再太郎不至るまで耳新を思ひ
ける。當下登桐良干の莊小向うに向ひて言の勢を演じて争う。今小羽ぬこま
ども和君等八人の天授の才を。生れり。知るふあつて。今戦國の時方々武
備いゆる。文學を自得の如く。至んや。感心の外ひらき。とをを廿廿あへむ。
否と。我の甫の七歳で。逆旅の母を喪ひ。大塚草六の小厮せむ。ま
身の最賤。かける。幸や。大塚と情地の友垣を結び。那人の帮助よ
ま。和漢の史傳を見る。をゆる。と文の。大村大坂あり。又大江あり。大塚あり。
我よ及ぶ。所あむ。井を與言ら。と卑下。餘談不及ひ。問話休題。

余程の犬川莊小犬田小文吾の。日猛可。士卒小下知。菅原人一千有
餘を作ら。其偶人の外を堅く。内を空虚。是則外敵の望を
受く。内敵の鐵砲鉛丸を受納。せん。為に。既して其。自。都々
作り。是。縮衣を被せ。船四五十艘。分り載。士卒。其陰
在。這艦隊の頭人。登桐山八郎良干。満呂復五郎重時。並。満呂再太郎
信重。安西。就。景重。相。從。艦。每。雜。兵。船。工。と。共。二十。名。過。り。けり。
あの日。十二月初の三日。入れ。黒。白。も。真。夜。半。時。候。妙。見。嶋。と。西。河。原。に
る。敵。の。柵。近。く。潛。上。り。諸。艘。一。度。小。真。然。と。攻。鼓。と。打。鳴。ら。一。陣。の。聲。を
あ。菅。原。人。の。陰。より。火。銃。を。發。ち。箭。を。射。出。し。て。突。然。と。して。攻。入。り。す。く
欲。し。其。勢。ひ。を。見。る。程。二。柵。を。守。る。敵。の。頭。人。後。嶋。郡。司。將。衝。小。越。小
權。太。表。練。彦。別。夜。又。吾。數。世。の。士。卒。と。俱。小。教。馬。課。で。敵。の。言。宣。ま。す。

見定めぬがれに只破糸と構う攻鼓の音聞の聲とあべゆり各相争ふて鏖
砲を發ち登前を射る工雨霰より敵系よりければ敵ハ挽き去らばして相挑む
と二响許天ハ明ると暮る時良干と重時ハ徐小諸艦と漕返さる那
里の首尾を莊小と小文吾不報知り却其詰朝蒿采人小立は登前を合
る約莫二三萬條えあり又蒿采人を解して内止り一銃丸を合々坐す其
銃丸二三斗ありければ勞せむて得ありと笑ざる者ありけり倦而十二月四日
ありぬの日廿壯小文吾の良干重時信重景重等の諸士を集めて示せり
御舟洲崎の御陣より遣され快船來着て大阪大山の奉書あり小在り
敵ハ月の八日の曉天水陸俱ハ推寄せ勝負を決まべいと云既ハ其結え
あり然るべの地向敵の軍兵も今日秋明日ハ必多べし因る其使者詰茂
佳橋等の幸便縁り復其情願並ハ再大就人の事の趣を大阪大山ハ

消息を件の御使船と返去り必少え上らべし却今日の軍議ハ別事
るる敵の二柵頭人士卒ハ昨宵銃も計られて多く前九を費し
れハ今宵又船と寄寄とも懲りて備を做さるる其懈まる時臨して諸
艦一漕を短兵急ハ伐破れ但一那二柵の汀渚より十間許水中
火鐵の鏢索と張耳して艘械と遮り馬脚を掛駐んと構うと少ぬ
昨夜ハ我艦其里まで届らばあやめり身りる今宵ハ我艦引れども必
件の鏢索と踰ぎ柵の近つことゆへにの是什麼と商量を莊小と共侶ハ
小文吾も亦是を談き軍議ハ脱落さるけり登時満呂復五郎重時ハ
突然と找と出で則二天士ハ朝いてのち其水中る鏢索の事ハ昨日告稟
あり如く人魚の膏油の奇菜あり是をとり刃ハ塗れハ數百斤の鐵よりとも豆
腐と研るより易いと云是をり今宵の満踏を在下小許一の再大就

介を相伴ふて。情地の今井河を。ぬぐ前。面へ。歩いて。水中の。鏢索と。断つ。且。柵の水。門より。潜び。入て。火と。放ち。柵を。焼て。暗。晝と。仕。ん。この。這。義を。あ。の。美。を。と。思。ひ。入。り。請。薦。れ。ば。莊。介。有。理。と。領。り。て。其。美。宜。一。か。ら。む。縦。柵。と。攻。破。る。と。も。善。悪。も。別。ぬ。鳥。夜。る。れ。ば。不。知。案。内。の。自。家。の。與。共。進。退。不。便。多。る。と。和。殿。先。柵。と。焼。く。并。と。燭。や。て。漏。れ。者。な。く。必。敵。と。亡。ま。べ。柵。の。頭。人。衆。兵。々。昨。夜。小。徴。々。備。を。做。さ。と。思。ふ。元。自。推。量。の。猶。小。心。不。あ。く。と。和。殿。今。宵。先。柵。と。情。地。の。河。を。涉。さ。も。只。の。功。を。貪。り。漫。不。憚。ら。び。失。わ。る。心。勉。慎。ま。ね。と。敬。言。れ。ば。重。時。の。竹。然。と。歎。び。不。堪。ま。れ。言。美。多。退。れ。け。り。悠。而。大。川。大。田。兩。將。の。俱。今。宵。の。隊。配。と。做。さ。ま。壯。介。八。千。五。百。の。兵。を。お。て。西。河。原。の。柵。と。伐。破。る。べ。し。又。小。文。吾。も。千。五。百。の。兵。と。わ。て。妙。見。嶋。の。柵。と。破。ん。と。四。日。の。日。暮。ま。る。俱。の。

數十箇の艦と汰へて。情地の。船。を。の。餘。の。衆。兵。を。留。め。塩。濱。の。本。陣。と。守。ら。ま。る。登。桐。山。八。郎。良。干。と。頭。人。と。ま。那。二。柵。と。破。り。後。小。徐。の。河。を。涉。さ。ま。為。る。悠。一。程。不。満。呂。重。時。の。再。太。就。介。と。共。侶。お。甲。夜。より。先。駈。の。准。備。と。る。ま。先。那。人。魚。の。膏。油。と。り。て。各。帶。る。兩。刀。と。抜。出。し。塗。る。と。幾。番。も。と。知。く。ま。の。餘。の。二。個。の。一。身。九。孔。都。て。漏。れ。塗。ら。ま。る。小。肌。膚。光。澤。や。る。不。勝。理。細。く。不。做。り。て。寒。氣。と。覺。む。惜。む。べ。し。又。膏。油。お。お。盡。た。け。り。悠。而。這。義。介。子。義。任。の。俱。牛。の。項。草。と。り。て。綴。り。る。身。甲。と。て。鮫。皮。の。針。脛。衣。膚。の。鏢。衫。と。被。る。の。腰。不。跨。る。兩。刀。と。波。お。合。せ。られ。と。も。吊。緒。と。掛。て。帶。お。係。だ。重。草。の。燧。臺。と。各。脇。の。邊。不。楚。と。來。て。水。お。入。り。濡。さ。と。ま。り。既。や。て。よ。の。夜。中。の。左。側。お。下。今。井。より。二。三。十。町。許。る。河。上。お。造。り。と。ら。連。り。と。暴。河。お。入。る。現。奇。某。の。效。驗。違。は。今。

八代傳し屏風三十二
共六
大英堂藏

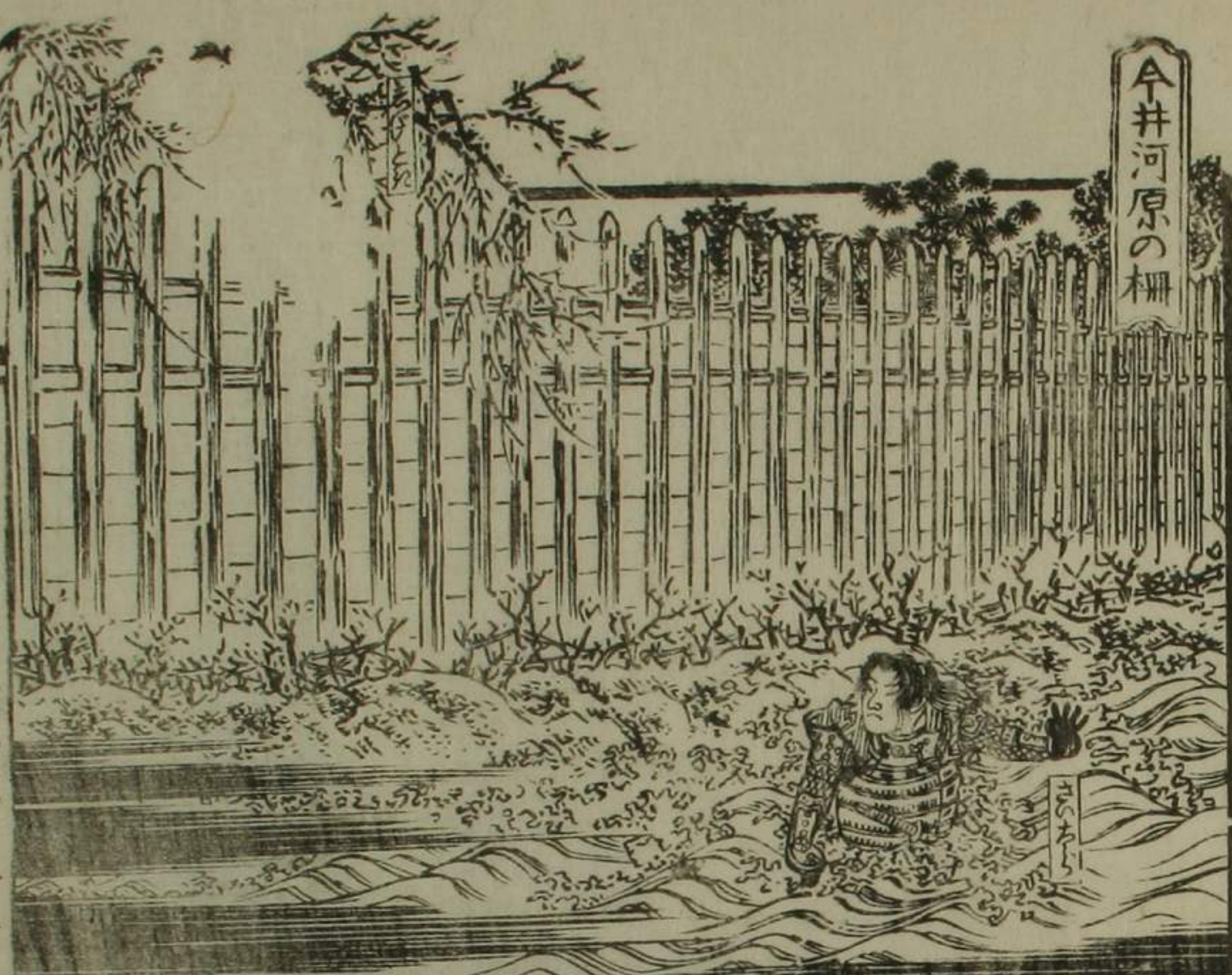
宵の寒風沙と飛。波濤起噪。且流早。れが音不。水の勢。水
 海夜。困入る心地。堪。か。思ひ。水入りて。倒。其温る。を
 湯の如く。且暴波を被。呼。吸自在。地上。異なる。淪。ぬ。も。あ。の。つ
 り。身。の。浮。く。泗。糸。易。く。再。太。郎。の。夏。の。日。毎。不。這。星。糸。河。を。涉。ま。う。が。推
 流。さ。る。べ。く。も。あ。る。重。時。も。亦。上。總。る。海。濱。や。水。不。孰。で。る。甲。斐。あ。り。く。も
 亦。俱。あ。り。泗。糸。不。獨。就。介。の。尚。未。熟。や。這。星。糸。河。不。堪。ざ。り。け。ん。動。も。ま。ま。と。お
 流。さ。る。と。重。時。再。太。相。扶。けて。妙。見。嶋。と。西。河。原。の。柵。の。間。を。河。中。の。洲。あ。る
 処。不。來。ふ。け。れ。が。這。頭。の。都。て。淺。瀬。を。僅。不。足。の。立。ど。も。て。共。侶。不。一。要。時。憩。て
 猶。も。便。宜。と。ゆ。き。欲。ま。る。重。時。の。豫。より。就。介。再。太。郎。不。悄。語。て。事。の。あ。る。を
 妙。見。嶋。の。小。敵。へ。西。河。原。の。柵。を。燒。く。那。里。の。あ。の。ぐ。り。う。乱。れ。走。ん
 再。太。郎。の。那。邊。不。張。且。一。る。水。中。の。大。鐮。索。と。斫。棄。て。自。家。の。艦。の。去

向を用。我の汝。先。獨。西。の柵。近。つ。て。潛。び。入。る。免。便。り。あ。ら。ん。招
 死。を。俱。不。せ。ん。必。惴。る。と。諭。を。就。介。再。太。郎。の。あ。ら。ん。を。れ。が。切。不。找
 生。毛。權。且。不。息。ふ。の。う。ろ。水。ら。上。の。物。者。の。只。是。三。個。の。乳。ら。上。の。も。仰
 天。を。瞻。れ。霜。滿。星。目。光。め。た。く。友。喚。ぶ。知。鳥。の。聲。ま。る。の。も。誰。思。ひ。難。く
 妹。許。ゆ。り。河。風。寒。と。冬。の。夜。の。闇。不。目。不。見。る。の。も。一。恁。而。在。る。免。不。あ。ら
 され。再。太。郎。の。又。悄。や。ら。妙。見。嶋。の。う。ろ。泗。糸。不。果。して。柵。を。去。る。と。遠。く。ぬ。水
 中。の。張。且。一。る。大。鐮。索。兩。三。條。あ。り。れ。が。軀。て。腰。を。比。首。と。脱。出。て。是。を。斫
 る。不。奇。茶。の。效。神。妙。る。か。る。宛。草。蔓。を。其。又。る。像。く。力。を。入。れ。ぎ。て。断。れ。け。り
 有。恁。り。一。程。不。重。時。の。就。介。と。洲。不。留。めて。身。單。又。急。流。を。凌。ぎ。て。西。の。柵。近
 つ。か。あ。の。亦。水。中。の。張。且。一。る。大。鐮。索。あ。れ。が。腰。刀。の。り。是。を。断。り。不。皆。其。刃。の
 隨。て。斫。ら。れ。て。水。底。不。沈。と。一。く。重。時。深。く。心。不。感。して。人。魚。の。膏。油。の。大。奇。大

效用る所一も違途惜哉是より自家の士卒不配合せされが我の事にて
 後竟お世の人知る由る候べしと思ひて猶近つて水門より柵内へ潜ひ入る
 く着る程七八間ある一時思ひより柵内より檣と發せる大砲不憐むべ
 重時の半身赤土粉ふ打碎れけん水火激き殺伐の音共侶不波の底不倫
 果て水屑ふ做らる魂早く天の歸り六魄既お地へ入る死を常迅速今由
 らる就介の吐嗟とむらふうち驚驚と透し見る果して小父の打碎れけん
 波の寄るの三人のあまを怎麼何れか命運薄きと憊も量りし今宵の先
 駈五十歩百歩の間不至りて杖と憑きて来し甲斐もなれ世がらふらぬ死
 人の終りの果敢るさよ悲しなるといへる音おと立ね較人の涙珠成を歎
 きてせん術知るを在りし程満呂再太郎信重妙見嶋の柵近水中央大録索を
 皆斫捨る水音をせ波も起せ引返を方寸委る孝順義勇さすとい

親の侯らんと思ふ心の急れて就介が憩ひ居る舊の洲の復讐は事一則事の
 凶變と就介が告るとして胸淡れ勢ひ折を俱お哀れ堪えられ返らぬと云
 と悔て且うち歎くと思へも計の劣所と知る進退を不谷りて愀然と云
 半响許儘せ世を任る不真愛と知るや丑三の鐘聲幽ゆえけり有徳
 程お大川大田三隊の戦艦數十艘昨夜のどき業人を建る艦五六艘と
 先中て分れて件の二柵へ悄々お来りて再太郎の就介と俱お逢ふ透
 見く他那艣响へ自家の艦の既お漕を来りて我大人空きりたりと我
 們お在るが放火の約束と違へば戦ひ竟お合期せ自家敗軍及
 ん候是も亦知るべし然るは是大事と祈る我々が罪免れを幸ひあて
 饒さるとも其折何を面目や我両將お見んや左ても右ても死は身先
 や柵内お潜ひ入て折もよ火と放さ敵の用心堅固を其事倘做る一人を

今井河原の柵



八犬傳九輯卷三十五



此の出像の本文へ上下共第百十三回あり後板出るお及て詳るべし

此九

○文庫堂蔵



うき世

小文五五

みらら


八犬傳九輯卷三十五

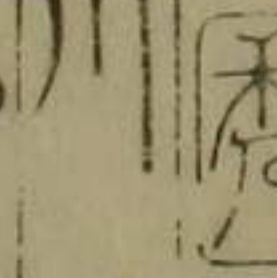
○文庫堂蔵

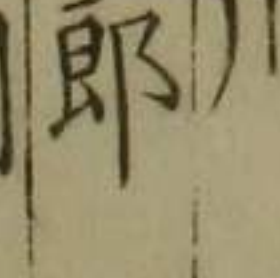
敵と殺して共侶に戦殺せん今ら躊躇と性起る武勇に獎さる就
 衆有理と感激して开ハ勿論の事から意不那水門の内史守衛の敵兵を
 小父ハ矢場を敷き然る猶徴りぞ又那里より入る欲其前車に
 思不似る。多々甚麻と談れ再太郎亦領れて然入愚按も其頭小過
 因て意不他那西多波稍盡処より右のく都て柵の助を守兵必稀を
 矧亦那柵内より水上に垂る老柳一株われ开と樹傍へ潜び入る期は後れ
 背隊とも敵の用心那里も届て由断さる。誘ふといふをせば就此這議
 従て敢又尋思不及心術一對武勇の少年。傳ハ言くわ波の浮多沈
 立立酒死して柵の背隊不迫にけり畢竟這両少年が怨不堪死を極め
 孝義の先驗果せるや否や开ハ又下回解分るを聴ねが。

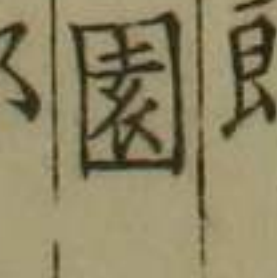
南總里見八大傳第九輯卷之二十五終

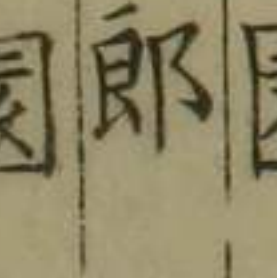
南總里見八大傳第九輯下帙下乙號中畫工筆耕彫匠名號目次

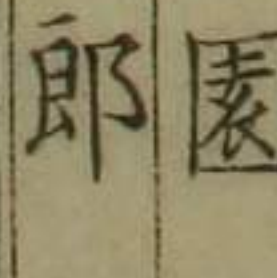
出像畫工 玉蘭齋貞秀 

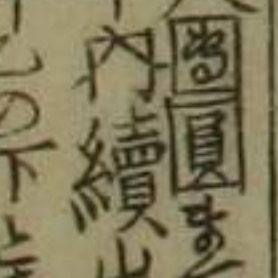
淨書筆工 谷 金 次 郎 

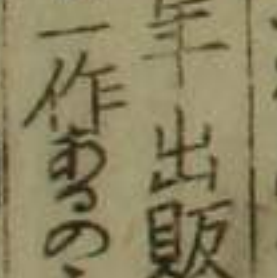
卷三十三 澤 金 次 郎 

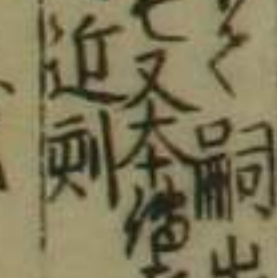
卷三十四 常 盤 次 郎 

彫工 卷三十五 澤 金 次 郎 

三十五下 澤 金 次 郎 

南總里見八大傳第九輯下帙下乙號下編 五冊大團圓 

新書 中本第一集三冊 玉蘭齋貞秀画 来子の年出版 

開卷驚奇俠客傳第五輯 延引廿九年々々大傳刊刻の故をり 

八代傳心昇卷之二十一

早

大傳心昇卷之二十一

近世説美少年録第四集五卷

この一書も中絶有る客傳不問八犬傳結局皆板の後必死出さるべし近刻

著作堂一夕話

翁の隨筆なる物不是と二席話と録一又京雜の記と雜交記とありて其の甚しきと備訓を附ける其の甚しき誤り。初集大本三巻近刻

右曲亭翁の新編本房近刻の者と畧記を 江戸書林 文溪堂正舖藏板

曲亭翁精編八犬傳の一書を全本九十有二冊百七十回ありて結局大團圓に至ると云ふの内中第六十一回以下所云第九輯下秩の下し號の下編五冊も陸續刊行しての全壁と云ふも翁二十六七年の腹稿大筆和漢との外ふりたる所最勉と云ふべし刻板全部本房藏幸佳紙良刷製本美之甚く賜顧の君子全備既ふ遠く後板の如きを俟ぬか

○家傳神女湯 一包代百銅 ○熊胆黒丸一年のいけをりて丸を一包代五下

婦人の専ら妙藥つねにいけをりて丸を一包代五下

○精製奇應丸大包代五下 製藥本家 弘所元版田中坂下南側中程よりの向ふに氏

○御茶ねの仙女香 一包四十八文 黒油美香 頁四十八文 江戸京橋南橋三丁目程坂本氏

○金匡救命丸 本郷林氏製 弘所 江戸 書肆 丁子屋平兵衛

大阪	河内屋喜兵衛	東京	須原屋茂兵衛
同	伊丹屋善兵衛	同	山城屋佐兵衛
同	敦賀屋九兵衛	同	小林新兵衛
同	秋田屋太右門	同	丸屋善七
同	河内屋茂兵衛	同	和泉屋市兵衛
同	河内屋和助	同	須原屋伊八
同	秋田屋市兵衛	同	出雲寺萬治郎
同	出雲寺文次郎	同	椀屋喜兵衛
同	村上勘兵衛	同	辺江屋半七
同	勝村治右衛門	同	長門屋龜七
同	杉本甚助	同	三家村佐平

名山閣 東京芝大神宮前書舖 和泉屋吉兵衛發售

